



ミュージアムにおける多様性の擁護と統合への試み ーロンドンの「マイグレーション・ミュージアム」 の展示を中心にー

大関, 絢子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2025-09-25

(Date of Publication)

2027-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9340号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100498380>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位請求論文審査結果報告

博士學位論文

論文内容の要旨及び審査結果の要旨

氏名 大関 絢子

学位の種類 博士（ 学術 ）

学位授与の条件 神戸大学学位規程第5条1項該当

学位論文の題目

ミュージアムにおける多様性の擁護と統合への試み
ーロンドンの「マイグレーション・ミュージアム」の展示を中心にー

審査委員	主査	教 授	木村 幹
		教 授	松並 潤
		教 授	小笠原 博毅
		教 授	土佐 弘之
			(ノートルダム清心女子大学)

論文内容の要旨

論文題目：

ミュージアムにおける多様性の擁護と統合への試み
—ロンドンの「マイグレーション・ミュージアム」の展示を中心に—

氏名： 大関 絢子

アメリカをはじめとする世界各国で深刻化する社会的分断。その中で焦点となっている問題の一つが、移民を巡る問題である。トランプ政権による、不法滞在移民に対する政策や、我が国における外国人排斥運動に見られるように、各国で外国人労働者をはじめとする移民達は厳しい状況に置かれつつある。

それでは我々はこの様な状況にどの様に対処する事ができるだろうか。各種ある様々な社会運動の中で本稿が注目するのが、社会運動の手段としてのミュージアムである。かつては、社会における既存の価値観等を提示する役割を果たしていたミュージアムを、進んで積極的に新たな価値を提示し、社会を変革する事に役立てようとする動きは、ニュー・ミュゼオロジーと呼ばれるものであるが、本稿はこの、ニュー・ミュゼオロジーが移民を巡る展示においてどの様に実践されているかの実態を調査・描写し、その課題がどこにあるかを明らかにする事を目的としている。

本稿はこの目的の為に、以下の様な順序で議論を進めている。まず第一章では、人の移動に関する展示についての背景と理論について先行研究を記述し検討する。中心となるのは、本研究の理論的背景であるニュー・ミュゼオロジーの成り立ちとその内容についての紹介である。

続いて第二章では、イギリスでの国立や都市ミュージアムにおける人の移動に関する常設展示がどのように行われているかを、現地調査結果に基づいて紹介する。これにより、イギリスの移民に関わるミュージアムの展示にどのような傾向性があり、またどんな限界があるかを明らかにする。

第三章では、この様な既存のイギリスの人の移動に関わるミュージアムの問題を踏まえ、たとえば、イギリスにおける人の移動に関する最も先進的なミュージアムとして知られる「マイグレーション・ミュージアム」についての展示の紹介とその意義を考察する。考察は次の二つの段階によって行われる。即ち、第一にこのミュージアムが設置から運営に至る過程の整理であり、これによりミュージアムが何を求めて設置されたかが明らかにされる。続いて、第二にこれまでのミュージアムの展示の実態を紹介し、その展示がどの様に変化していったかを明らかにする。

第四章では、これらの展示において、移民の多様性がどう表現されているか、を明らかに

する。その中でクローズアップされるのが「女性の移民」の不在という問題である。即ち、先進的な試みである「マイグレーション・ミュージアム」においてすら、移民が多様な人々から構成されている事、そしてその中で重要な要素であるジェンダーが存在する事についての配慮が不足している事が指摘される。

そして最終章では、これらの章の内容をまとめる形で、ミュージアムに共通する問題として、二点の問題点を指摘する。第一は新たなミュージアムもまた弱者を排除する理論の代弁者となる危険性があること、第二は新たなミュージアムにおいても、暴力的な同化主義の傾向が必ずしも克服されておらず、新たな形での同化の押し付けに繋がるという問題である。

論文審査結果の要旨

論文題目：

ミュージアムにおける多様性の擁護と統合への試み
—ロンドンの「マイグレーション・ミュージアム」の展示を中心に—

氏名： 大関 絢子

本稿は社会運動の手段としてミュージアムを再評価し、利用するニュー・ミュゼオロジー運動について、とりわけ移民に関わるイギリスのミュージアムを事例にその実態を紹介し、その限界点を指摘しようとするものである。筆者はこの研究の為に、現地イギリスのミュージアムへと足を運び、直接調査を行うなど活発な研究活動を行ってきた。その結果が示された本稿は少なくとも我が国においてははじめての、イギリスにおける人の移動に関わるミュージアムとその社会運動との関りを網羅的に紹介するものであり、高い資料的価値を有している、という事が出来る。

また、合わせて本稿はこのイギリスにおける人の移動に関わるミュージアムを紹介するに辺りその主たる分析の基準を社会的統合と多様性の二つにしている事に特徴がある。即ち、この二つの基準を下に視点を定める事により、多様なミュージアムの展示に関わる既述を単なる各々の紹介に留まらない、一定のまとまりのあるものとして提示する事に成功している。

しかしながら、その事は本稿に問題がない事を意味しない。第一の問題は、先に述べた本稿の分析の視点そのものの問題である。即ち、本稿においては、ミュージアムが目指す運動の方向として社会の統合が、当然の様に置かれているが、そもそもここでの統合が何を意味しているのか、例えば、旧来の国民国家秩序への「同化」とどこが異なるのかは、必ずしも明確ではない。また同様に重要な基準として提示される多様性についても、社会的統合がなされており、更には多様性が確保されている状態というのが、いかなる状態なのかは必ずしも明らかではない。これらのミュージアムの展示を分析する基準が不明確な事は、当然、ミュージアム展示の分析を曖昧なものとさせる事になっている。

第二の問題は、ミュージアムの比較に用いられた「六要素」と社会運動の方向性との関係である。「六要素」は、ミュージアムに距離感を感じるような人々やミュージアムの持つ理念とは異なる考え方をしてきた人々に、「自分事として考える工夫」によって来館者の意識と行動の変容を促す展示の仕方とされている。しかしながら、同じような展示の工夫、たとえば「当事者の声」を伝えたり、参加型展示を用いたりしても、そこで展開されるストーリーを代えれば、全く真逆な方向へと来館者の意識を変えていくことは容易に想像できる。ニュー・ミュゼオロジーの理念の実現の程度を論ずるはずのミュージアムの比較が、来館者の

心への働きかけに関するテクニカルな手段レベルの議論になってしまったことは、本稿がイギリスにおける移民を取り扱うミュージアムを比較した日本語では初めてのものであるだけに、惜しまれる点である。

そして第三の問題は、そもそも社会運動の手段としてのミュージアムがどのようなものであるべきか、が必ずしも示されていない事である。例えば、人の移動に関わるミュージアムの展示目的は、移民等の生活の実態等を示す事であり — 筆者の前提を受け入れるなら — その社会的統合の必要性を訴える事であろう。それでは問題は、そこにおいて敢えて異なる社会運動の 이슈であるジェンダーの多様性を扱う意味はどの程度あるだろうか。その事の難しさは、例えば、逆にジェンダーを巡る問題を扱うミュージアムにおいて、移民のジェンダーを巡る展示を必ず置かねばならないかを考えれば明らかになる。重要なのは、ニュー・ミュゼオロジーが社会運動である以上、運動には目的があり、展示はその手段である筈であり、故に展示内容が必ずしも網羅的である必要はない、事である。その意味で本稿終盤の分析は、「マイグレーション・ミュージアム」の展示に関して「ないものねだり」をしている感があり、その議論の構造を一部損なう事になっている。

とはいえ、以上の様な本稿の問題点は、筆者の今後の研究の遂行により補われるべきものであり、本稿の価値を大きく損なうものではない。

上記のような理由から、審査委員は一致して、本論文の著者である大関絢子氏が博士（学術）の学位を授与されるのに十分な資格を有するものと認定するものである。

令和 7 年 7 月 10 日

審 査 委 員 主 査 教 授 木 村 幹

教 授 松 並 潤

教 授 小 笠 原 博 毅

教 授 土 佐 弘 之

(ノートルダム清心女子大学)